

●『東方』二八六号より

バルザックの翻訳者、傅雷

新島 進

映画版が日本でも公開されたダイ・

シージェ『バルザックと小さな中国のお針子』（拙訳、早川書房）は、作者の文革体験をもとにした青春小説だ。よって、暗い世相が背景としてある。だがダイはむしろ当時の状況を、「本が禁じられた世界」という設定として活かし、そこで逆説的に生じる文学への渴望を、異性愛のめざめとともに描いた。現在パリ在住の作者は同作品をフランス語で書き、異例ともいえる成功をおさめたが、しかし一部には、これをナイーヴな西欧文化賛美——バルザックの国の読者への媚び——としてとらえる批判もあった。本への渴きをいやしたのがバルザックで、中国人作家ではなかったからである。しかし小説の大詰めに、実はこんな一節があ

る。

医者は（主人公が書き写したバルザックの一節を）読むというよりはむしろ鑑定を始め、タバコの箱を出すと、僕に一本差し出した。そして吸いながら、文章に目を通した。

「この翻訳は傅雷だな、文体で分かる。かわいそうに、お前の父さんと同じ人民の敵だ」医者はつぶやいた。

この言葉を聞くと涙があふれてきた。どうにもこらえようがなかった。僕はガキのように泣きじゃくった……。思うにそれは、小裁縫のためでも、使命を全うしたためでもない、会ったことのないバルザックの翻訳者のための涙だった。それは知識人というものが現世で勝ちとることのできる最高

傅敏編／榎本泰子訳

君よ弦外の音を聴け



四六判 320頁
樹花舎 [2310円]

の敬意であり、恩恵だろう。

つまり、この場面でダイがオマージュを捧げているのはバルザックよりむしろ、フランス人作家を命がけて訳した中国人翻訳家のほうなのだ。作中、主人公に——当時のダイ本人にも——一番大きな影響を与えた小説は、タイトルとは裏腹にロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』なのだが、これもまた同じ訳者が手がけた本である——この人民の敵、傅雷とは何者なのか。このたび刊行された『君よ弦外の音を聴け』（榎本泰子訳、樹花舎）は、同人物の書簡集『傅雷家書』（傅敏編、遼寧教育出版社）の日本語版だ。手紙の

宛て先は、国際的ピアニストの傅聡。傅雷の実子である。

訳者あとがきによれば、傅雷は一九〇八年生まれ。二十歳頃、フランスに留学して西洋美術史を学び、同時に西欧の音楽にも親しんだ。四年後に帰国すると、バルザックやロマン・ロランの翻訳にとりくむ。とりわけ後者の大河小説『ジャン・クリストフ』は傅雷の、そして当時の中国文壇における記念碑的な訳業とされている。その長男、傅聡は一九三四年生まれ。幼時より優れた音楽的才能がみとめられ、国内の恵まれない環境でピアノを学んだあとポーランドに留学、シヨパンコンクールでアジア人初の三位入

賞を果たす。やがてロンドンに亡命し、当地でユダヤ系ヴァイオリニスト、メニューインの娘と結婚した。七十歳を迎えた今も現役のピアニストとして活躍しており、先頃も来日公演が行われたばかりとのことだ。

そんな二人のあいだの書簡は、息子のポーランド留学から父の自殺直前まで続く（一九五四年～一九六六年）。原書に収録された二百通の手紙のなかから、日本語版では七十四通ほどを選んで訳出している。

書簡集という体裁ではあるが、これは複数の観点から読める傅雷の著作である。彼の思想、人となりを知るための絶

好の資料だ。まずは「父」としての傅雷がいる。だが、その線で読み進めると、「これが自分の親父だったらたまらない！」と辟易するばかりだろう。息子への説教は、礼儀作法から筆遣いにいたるまで実に細かく、さらに理詰めの説教がそれに加わる。たとえば傅聡が、留学先をポーランドからソ連に移そうかと悩んでいるときなどは、「君の代わりに私が考えてあげよう」とばかり、留学した場合／しない場合の利、不利をチャート式にまとめてみたりする。息子の役に立ちたいという思いが通じず、傅聡が重要なことを父との相談なしに決めようものなら、「私はもう君の役には立たない老いぼれなの

だ」と駄々をこねる始末。どうにも子離れができていない父親である。

また息子への賛辞が、筆の勢いでどこまでも高まっていき、やがて己の愛国心へとすり替わっていく件などは戯画的ですらある——「今や、君が開こうとする演奏会は、全て国家の体面に関わってくるのです。個人の栄辱や得失などは小さな事、国家のそれこそが大事なのです」

インテリ家庭のエリート教育とはかくなるものかと——いや、これは極端な例であることを祈るが——息が詰まる思いがある。ほかに道德の教科書に出てきそうな文言が全編にわたって見られるが、正論じみて実はあまり心に響いてこない。その点、数編含まれている母親からの手紙には真実味があり、むしろ慈愛に満ちて、これがまさに親から子への手紙であろうと安堵する。傳雷のしつけは厳しく、彼は後年それを反省したというが、こうした気質は書簡からも十分に感じられる。

「父」の手紙は同時に、中国建国、百

花斉放・百家争鳴から文革という時代の流れに翻弄された「一知識人」の苦悩の記録でもある。マルクス・レーニン主義の実践について長々と持論を展開する箇所では、「旧社会」の教養を身につけた知識人が、いかにこの新思想と立ち向かい消化しようと努めたか、その一端をかいま見ることができる。また、これほどの知性をもち、そして右派分子の一員とされていた者が、かの国家指導者を盲目的に個人崇拜していたことは私にとって少なからぬ衝撃だった——「偉大な毛主席は遠くから万丈の光芒を投げかけ、君の前途を照らしています。主席の期待に背かないようがんばりなさい」彼はこうして共産党へ忠誠を示して「自己改造」に勤しみ、強い愛国心のもと、その国家建設に献身的な協力をする覚悟でいた。

しかし文革の嵐が吹き荒れるや、奮励努力の甲斐なく、時代は彼を人民の敵とみなす。さらに唯一の希望、ピアニストとして国際的な名声をえた息子は留学先

から中国には戻らず、イギリス亡命という道を選んだ。最後の手紙でも、傳雷の「新社会」への意気込みは変わっていない。だが、すでに力は尽き果てているのがうかがえる——「私たちは不断に自分を『改造』しなければならず、一切の伝統的な、資本主義的な、非マルクス主義的な思想感情、習俗と闘わなければなりません。私たちはあらゆる古い人生観と古い社会規範を捨てなければなりません。／旧社会で四十年も暮らしてきて、頭が『西洋資本主義的民主反動思潮』で一杯の人間にとっては、彼（毛）（主席）の言う『自己改造』はどうしてもひどく重い任務になります。私たちはできるかぎりを尽くし、全力を傾けて現在『プロレタリア文化大革命』が要求するさまざまなことに応えようとしています」

この手紙の数週間後、傳雷の自宅を紅衛兵が襲う。つまらない因縁をつけられて反党の烙印をおされたバルザックの翻訳者は、妻とともに自殺することで無罪を訴えるしかなかった。本書の最後に収

録された遺書のなかでは、あれほど愛した息子について、「ましてや裏切り者の傳聰を育てたということだけでも、人民に対しては死んでも償いきれない罪なのです」と書く。憤怒と慟哭が渦巻くこの自己批判文には言葉を失う——ここに浮かびあがる苦悩する「知識人」の姿は、傳雷の「父」としての弱さを弁護してあまりある。毎度の書簡で繰り返される「手紙をもつとよこせ」という嘆願、息子に対する多大な要求は、その芸術家としての大成だけが心の支えであった傳雷の、孤独な魂の悲鳴として変奏される。

父、そして知識人としての傳雷に加え、最後に「芸術史家」としての彼がいる。書簡のもっとも普遍的な価値はその芸術論にあるだろう。「シヨパンを弾く中国人ピアニスト」を育てた者が到達した、芸術と民族性についての考察。西欧美術をアジア人の視点から眺めたときに浮かびあがる、キリスト教文化の害悪など、豊かな学識に裏づけされた論が、折に触れて書簡を濃密なものとする。そして、

なにより印象的なのは芸術に対する無償の愛であり、どこまでも真摯な態度だ。傳雷は、芸術家が至高の作品を生むためには、自身の人間性を高めなければならぬと繰り返し訴える。この考えには、自ら訳した『ジャン・クリストフ』が大きな影響を与えているのが察せられ、また傳聰に求めたのもまさしくそうした芸術家像にはかならなかった。

冒頭で引いた『バルザック』を、私は傳聰のCDを聴きながら翻訳したが、偉大な同業者であるその父については、本書が刊行されるまで、どういった人物なのか知ることができなかった。またダイ・シージェにインタビューした際、「傳聰のピアノは好きか？」と尋ねたのだが、肯定の返事があっただけでそれ以上話が膨らまなかった。時間の都合もあったのだが、今思うと、もっと傳雷、傳聰親子について質問をすればよかったと悔んでいる。そもそもダイは当初、西洋美術を学ぶために渡仏したのであり、解説で白井啓介氏が紹介している傳雷の『世界

美術名作二十講』（三聯書店）なども読んでいたかもしれない。息子ばかりでなく、傳雷はのちに世界で活躍する中国人芸術家を数多く育てたのだ。

あるいはもし息子、傳聰が、冒頭で引いた『バルザック』の一節を読んだら、どんな表情を浮かべるだろうか？『傳雷家書』には傳聰からの返信が一通も所収されていない。読者は、息子が父の手紙をどう受けとめたのか、それを想像して読み進めなくてはならない。訳者の榎本泰子氏によると、両親の非業の死を異国で知った傳聰は、記者の前で黙して語らず、「ただある日の演奏会で、聴衆に向かつてこう言ったという。『今日演奏する曲は、どれも生前両親が好きだったものです』と——この言葉の弦外／言外に、百もの手紙に匹敵する、子から父への返信を聞いた気がした。

（早稲田大学理工学部非常勤講師）

